
メカプリンセスっ！ ~プリンセス様、もう勘弁してください~

けすとねる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メカプリンセスっ！ ～プリンセス様、もう勘弁してください～

【Nコード】

N2391BA

【作者名】

けすとねる

【あらすじ】

俺が出前のラーメンを届けた屋敷で出会ったのは、美しいブロンドの髪に透き通るような肌、きれいな紫色の瞳を持つ、中性貴族のコスプレをしたロボ女だった。バルカン砲で撃たれたり、ロケットパンチで殴られたり、体に爆弾をしかけられて「このままですと、五分後にあなたの体はこっぴあみじんになりますわ」。がらがらと崩れ去る俺の平穏な生活。もう勘弁してください、プリンセス様！ 完全マイペースな女アンドロイドに振り回される高校生男子の

悲劇を描いた、破壊型青春コメディです。 「小説家になろう」
初投稿です。ご指摘・ご感想などいただけるとうれしいです。でも
バカバカしいお話なので、真面目なストーリーを期待してる方ゴメ
ンナサイ……。

プリンセス様、出前をおとりになる

その屋敷のことは、以前から知っていた。

俺は毎週読んでいるマンガ雑誌を家の近くのコンビニで購入している。だがたまに売り切れていることがあるため、そのときは少し離れた本屋に行く。自転車で約十分。その道の途中に、例の屋敷があるからだ。

見るからに豪邸といった感じのそれは、塀の長さが何百メートルもあり、入り口の門は俺が通っている高校の校門よりずっとデカいきつとこの辺りでも ひよっとしたら全国でも有数の金持ちが住んでいるんじゃないかと思わせるくらい、大きな邸宅だ。さえない中華料理屋の手伝いを毎日やらされている、さえない高校生の俺なんかには一生縁の無いところだ。そう思っていた。

だがある日、学校から帰ってくるとすぐにオヤジから「このラーメン、出前頼むわ」といつものように渡されて行ってみると、そのラーメンの届け先がこの屋敷だったのだ。

まさかこんな形で屋敷に入れるなんて思っていなかった俺は、門の前に着くと自転車を降りて、しばらくのあいだぼうぜんと長い塀をながめた。曲線と直線の模様が刻まれた、西洋風の真っ白な壁。鉄製の門の向こうにはきれいに整えられた芝生の中に、白い小石詰めめの道が走る風景。その奥には、落ち着いたクリーム色の外壁の館

(……すげえ)

何度見ても大きな家だ。大きな家としか云えない。思わずため息

が出る。

（俺もこんな家に生まれてりゃ、好きなゲームがやりたい放題だったろうな……）

家ではマンガを読むかテレビゲームをするかしかない帰宅部の俺には、そんな発想しか浮かばない。まあ、こんな家に生まれた日には、一流大学に入るために毎日勉強づけにされるのかもしれないが。

でも一体、どんな人が住んでいるのか。というかそもそも、なんでこんな立派な家の住人がうちのラーメンなんか出前をとったんだ？ 疑問に思いながらも、とりあえずラーメンの入ったおかもちを手に門の横まで行ってみる。

表札は無い。近くにインターホンがあったので、押してみる。

（すげえ怖いオッサンが出てきたらどうすっかな……いや、これだけ大きな屋敷なら、執事が出てくるのか？）

いろいろ考えながら、返事を待つ。

少しして、インターホンから声が聞こえてきた。

「……はい、どちら様でしょう」

意外にも女性の声だ。もしかして、メイド？

俺はモノホンのメイドに会えることに興奮を抑えきれずもとい失礼の無いように丁寧な言葉づかいで答えた。

「『来陽亭』です。ご注文のラーメンをお持ちしました」

「あら、ありがとう。すぐそちらまで行きますわ」

そう云ってインターホンが切られる。意外に普通の対応だ。ちょっとほっとした。

すぐに、とはいっても屋敷自体が大きく、建物の入り口からこの門までもそうとう離れているから、少し時間はかかるだろう。そうタカをくくって、俺は今から現れるメイドがかわいくて清楚な娘でありますようにと祈りながらもこの間にラーメンが冷めないかと心配しながら、直立不動のまま待った。興奮してるな、俺。

と、そのとき。

とっぜん俺の頭の上で、ブンッ！ という鈍い音がした。

その直後。

どんがらがっしゃん！

と、なにかが数メートル先に大きな音をたてて落ちる光景が目に見えた。

「な、なんだ!？」

一瞬たじろぐ俺。

見るとそこには

中世の貴族が着るようなすその長い白黒のドレスに身を包んだ細

身の女性が、うつぶせになってぼったりと倒れていた。

「?????」

突然のことであっけにとられて声が出ない。そんな俺の前で、彼女はむっくりと顔を上げると、わりと高いところから落ちたはずなのに平然とした様子でぱっと起き上がった。そして服のすそをパンパンと払いながら、ひとりごとのように云う。

「(ピピッ?)……やはりテレポートでお迎えするのはまだ難しいようね。着地もままならないなんて……あら、あなたがラーメンを持ってきてくださった方?」

「は、はあ……」

いったいどうやって屋敷から出てきたんだ……。

ってか、この女だれだ?

着ている服は(期待していた)メイド服じゃない。歴史の教科書に載っているような、どこかの西欧貴族のドレス風の服だ。美術館にでも行つて「ああ、この時代はそんな服着てたんだ。すごいなあ」と適当に感心して終わるような時代錯誤な格好。映画の撮影ですか? と云いたくなるような衣装を、目の前の女は普通に着ている。

顔つきを見ると、歳は俺と同じくらいに見える。十六、七くらい。もしかして、ここの主の娘とか? にしても、普段からこんな服を着てるって、なんてコスプレの激しさだ。

なんとなく嫌な予感がして顔が引きつっている俺にかまわず、彼

女は上品な言葉づかいで話しかけてきた。

「わざわざここまでおいで下さって、感謝いたしますわ。お願いしていた『ちゃあしゅうめん』はそちらの中？ 少し見せていただけるかしら？」

「はあ……」

わざわざ見せるほどのものでもないんだが。

とって断る理由も無いので、俺はおかちからラーメンを取り出す。どこの中華料理屋にもある、いたって普通のラーメンだ。

だが彼女はどこか興奮した様子でそれを見つめる。

「まあ、これが『ちゃあしゅうめん』？ 手にとってもよいかしら？」

はあ、まあ、どうぞ、熱いので気をつけて下さいと俺が云うと、彼女は両手で器を持ち上げた。そしてラーメンの表面をこれでもかというほど凝視する。

(実はラーメンを見るのは生まれて初めてとか？ ……まさかな)

そんな俺の耳に、なにやら電子音や機械音のようなものが聞こえてくる。

「ゴゴ……ピピ……ガ……ピピ……」

「(……なんの音だ?)」

「成分……豚の肉……小麦粉……ネギ……水……醤油……豚の脂……魚介類原料不明……」

「……?」

すると彼女は、器にかぶせてあったラップをおもむろにはぎとると、いきなり指をラーメンの中につっ込んだ。

「あつ、熱いですよ!」

思わずさげんだ俺にかまわず、彼女はなにやらつぶやいている。

「……水面温度39 ……水中温度58 ……放出成分……」

「(熱くないのか……?)」

そうしてしばらく指をスープの中につけたままひとりごとを続けている彼女が、ふと視線をラーメンからはずして云った。

「あら、おかしいわ」

「えっ?」

「お茶の成分が検出されないわ。色が赤いからってつきり紅茶だと思っただけど……こちらの食べ物、何茶をお使い?」

「いや、お茶なんて入ってないですけど……」

「うそ。これ、茶臭麺じゃありませんの?」

「茶臭……」

茶臭……ちゃしゅう……ちゃーしゅう……チャーシュー……あ、なるほど。

「って、どんなラーメンだよそれ!」

「ダージリンの香ばしい香りのする、欧風ラーメンだとお母様から聞きました」

「あるわけないだろそんなラーメン!」

思わずタメ口でつつこんじまった。

「チャーシューっていうのは、ここについての豚肉のこと……」

「まあ、レモンライスやミルクを入れるんじゃないやありませんの?」

「入れるか!」

俺が云うと、彼女はがく然とした顔になって、力なく器をおかもちの上に置いた。

「なんてこと……わたくしの研究不足でしたわ……」

研究不足も何も、常識で分かると思うんだが……。

俺の嫌な予感が、最大限にふくらもうとしていた。

格好を見たときに感じたが、やっぱりそうだ。こいつ、なにかが絶対大きくズレてる。

金持ちのお嬢様だからなのか、なんなのか。まさかチャーシューメンを知らないとは。俺の方こそがく然としたい。

だが客の前でそうするわけにもいかず、俺は元のですます調に戻って云った。

「ええと……で、このラーメンどうしますか」

「せっかくだから、頂きますわ」そう云うと彼女はなぜかけろっと元の表情に戻り、またラーメンの器をもちあげた。

……なんでもいいや。とりあえず代金をもらってもう帰ろう。

「そうですか。ではお代を」と俺が云い終わらないうちに、彼女が云った。

「ここまで来て頂いたお礼をしなくてはいけないわ。なにもない家ですが、どうぞおあがりになって」

おあがり……

ってこの屋敷に？

「いや、出前に来たただけなんで、そこまでしてもらわなくても……」

首を振って断る俺。正直、家が豪華すぎて、俺みたいな人間が入

っていいのかとビビッてしまう。それに早く帰らないと、いつものように「どこで油売ってたんだ！」ってオヤジが怒るだろうし。

だけでもしかしたら、俺のくだらない一生のうちでこんな立派な屋敷に招かれるという機会は今無いかもしれない　　というか絶対無い。100%無い。

こんな家の住人に会っていること自体がすでに一生分の奇跡、喜ぶべきことだ(たとえその住人がどれだけズレていたとしても)。やっぱりここは　　いや、でもやっぱり　　。

そんな俺の心境など知る由もなく、彼女はお礼に誘ってくる。

「どうぞおあがりになって」

「いや、でもほんとに……」

「どうぞおあがりになって」

「でも……」

「どうぞおあがりになって」

「うーん……」

「どうぞおあがりになって」

「いや、やっぱり……」

「どうぞおあがりになって」

「ええと……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どつぞおあがりになって」

「……じゃあちょっとだけ」

「どつぞおあがりになって」

「はー……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どつぞおあがりになって」

「……」

「どござおあがりになって」

「分かってますって！」

「どござおあがり」……「ちんぐどござ」

なんてしつこさだ……。

プリンセス様、もっと出前をおとりになる

「いま紅茶をお持ちいたしますわ」

「はあ、ありがとうございます」

俺は豪華絢爛な応接室らしき部屋に通された。

天井にはきらびやかなシャンデリア、床には高価そうなカーペツト。壁には有名そうな絵。俺が座っているのはがっしりした木製の椅子。そして正方形のテーブルには真っ白で染みひとつないテーブルクロスに、真っ赤な花のささった花瓶がひとつ。

その先には、チャーシューメンの器がのっかっている。

どう見ても場違いだ。ラーメンと、俺。

店の小汚い服で椅子に座るのが申し訳ないくらい、室内全てが高級品（だと思つたぶん）で整えられている。築三十年ですきま風のかくうちの家とはレベルが明らかに違う。居心地がめちゃくちゃ悪い。

俺が落ち着かずいきよろきよろしていると、彼女がお盆に紅茶と茶菓子らしきものをのせて戻ってきた。そしてそれを俺の前に慣れた動きで置く。

「お茶はコートジボアール産のシズオカ・キョート茶、お菓子は台湾のパーティシエール、ニッポンノ・タマシーさんのマカロンですよ」

「（日本と外国がごちゃごちゃじゃねーか……ほんとにあんのかよそんなの）」

俺がいくぶん引きつった顔で目の前の紅茶とマカロンを見下ろしている、彼女が云った。

「さあ、召し取れ……あう」

「えっ？」

「（ココ……ピー）さあ、召し上げれ」

「（いま、召し取れって言わなかったか……？）」

さらに顔を引きつらせながらも、俺は彼女に云った。

「あの、俺にかまわず先にラーメン食べて下さい。麺がのびますんで」

「麺が……のびる？」

彼女が首をかしげる。

「麺がのびるということは……増量するということ？ ならわたくし、少し時間をおきますわ。その方がたくさん食べられますもの」

そういう意味じゃねー、と俺は心の中で頭を抱えた。

「あの……麺がのびるっていうのは、麺が水分を吸っちゃってコシ

がなくなるってことで……要するにマズくなるんです。それに時間がたったらスープも冷めるし」

「まあ、そうなの？ では、早めに食べた方が良いでしょうね」

云ったが早いか、彼女は俺の目の前から消えた。

「??？」

そして、俺の向かいの席にとっぜん現れた。

……あれ。俺、疲れてんのか。あいつが瞬間移動したように見えただな。きつと気のせいだ。

「では、失礼して」

そして中世貴族の少女が、やはりというべきか予想通りというべきか、箸ではなく金色に輝くフォークで、パスタでも食べるかのようにならぬとラーメンを食べ始める。頭が痛くなってきた。

だがいままで気がつかなかったが、よく見ると彼女はけっこう整った顔立ちをしている。透き通るようなきれいな肌に、やや紫がかった大きな瞳。肩の下までのびるブロンドの長い髪は毛先までさらりとして美しい。貴族の格好をして白く細い手で小さな口にラーメンを運ぶそのギャップが、むしろかわいらしく感じる。門の前での俺の祈りがかなえられたようでうれしい。神様ありがとう。でも神様、できればもう少しズレてないコの方がよかったかな。

彼女はなれない手つきで麺を全て平らげると、スープもごくごく一気に飲み干した。食べっぷりだけは気持ちいい。

「これがチャーシューメン……なんとも異国の雰囲気を感じる味ですわ」

そりゃ、西洋じゃないものな。

俺はマカロンを口に放り込み、紅茶を少しずつ飲みながら、彼女の様子をつかがった。スープは飲み干したのに、まだラーメンの器を両手にもちながら、その中を見つめている。

ん？ 器の底に何かついてるのか？ と俺が思ったその瞬間だった。

彼女が、器の縁に思い切りかじりついた。

「(ぶーっ!?)」

口に含んでいた紅茶が思わず吹き出た。

驚くというよりもはや「どうして?」という疑問がわく。彼女は陶器でできた器の端に歯をあて、しきりにカチカチと音を立てながらかもうとする。俺はもはや敬語をつかう気力をなくして力なく云った。

「……な、なにをしてるんだ……?」

「器をかじり取るうとしております」

「あの……器は、食べ物じゃない……んだが……」

「あら、器は食べるものではないの？」

当然食べるでしょ？ とでもいわんばかりに、彼女が純粹な目を向けてくる。

ズレ方が段違いだ。世間知らずというレベルじゃない。さすがにここまでの金持ちになると、平民が思いもよらない境地に達してしまふのだろうか。俺には一生手の届かない世界だ。むしろ知らない方がよかったかもしれない。

どうしたらいいのかさっぱり分からなくなった俺にかまわず、彼女はまた器にかみつき始めた。いったいあいつの頭の中はどうなつて

そう俺が思ったとき。

彼女が器の一部をぺきつ、とかみちぎった。

「いつ!?!」

そしてせんべいでも食べるかのように、彼女はパリポリと陶器の破片をかみくだいていく。

「……え……………あれ……………?」

俺は一瞬、目の前でなにが起きているのか理解できなかった。

彼女が、ラーメンの器を、食べている。淡々と。静かに。

ふと顔を上げた彼女が、不思議そうに俺の方を見る。

「どづふあされまふいたか？」

口を動かしながら、間の抜けたようにしゃべる彼女。口の中が切れて血だらけにでもなっついていそうだが、そんな様子は全く無い。

どうなっただ……？

まさかこいつ、人間じゃ……

いや、と俺は考え直した。他人を疑うのはよくない。

これは夢だ。俺が勝手に妄想した夢なんだ。

きっと彼女が現れる前から 屋敷の前に着いたときから いや、そもそも親父に出前を頼まれたこと自体が夢だったんだ。その証拠にほおをつねってみれば、ほら……いてっ。

涙が出そうになった。

一気に顔が青ざめる俺の前で、彼女はどんどん器を食べ進み、ついに全てを腹の中におさめてしまった。

「じちそうさまでした。とても美味でしたわ」

本来ならもう一段階前が出るべき言葉だと思うのだが、もはやそれについても自信がなくなってきた。

屈託のない顔で満足そうにほほえむ彼女に対し、俺はもうどんな言葉を返していいのかさっぱりわからなくなった。目の前のできごと

とが現実なのか虚像なのかすら判断がつかない。俺は半分思考が停止した状態で、か細く云った。

「……ああああありがとうございます。またよろしくお願いします。あ、器、頂いておきますね……」

「なにをおっしゃっているの。器はもう食べてしまいましたわよ」

「器……うつわ？ ああ、『ウツワ』のことですか。で、ウツワはおいしかったですか」

「ええ、とっても。長石と珪石の配合が絶妙でしたわ」

「そうですか。ならよかったです。あはは。あははは。じゃあ、器を頂いておきますね」

「なにをおっしゃっているの。器はもう食べてしまいましたわよ」

「器……『ウツワ』を食べたんですよね。じゃあ、器を……」

……。

しっかりしろ！しっかりしろ、俺！！ 目の前の現実から目をそむけるな！！

彼女はラーメンの器を食べたんだ！ どうやってかは知らないが、

とにかく食べたんだ！！　なんだよ『ウツワ』って！　自分で云っててわけわかんねーよ！！

俺は自分を奮い立たせた。俺がいまやっている格闘ゲームのキャラ、老ネルソン師範も云ってたじゃないか。「混乱したときこそ平常心。平常心が大事なのだよ」と。大丈夫。俺にならやれる！

などと俺が自分で自分をはげましていると、いつのまにか彼女は小さなかごをもって俺のそばに立っていた。

「おわっ！？」

びっくりして椅子から立ち上がる俺に、彼女は笑顔をふりまく。

「ボンボンはいかが？」

「ぼ、ぼんぼん……？」

「アメ玉ですよ。いかが？」

チャーシューメンのお礼だろうか。彼女が唐突にアメをすすめてきた。

よく考える俺。この非現実的な状況から抜け出すには、一刻も早くこの家から抜け出すことが一番だ。こんなアメを食べて「けっこのな美味ですね」などのんびりお世辞を云っている場合じゃない。自分を取り戻すんだ。そしてくだらないけどそれなりな元の世界に帰ろう。

俺はきっぱりとした態度で彼女に云った。

だが本能は、俺に強く告げていた。

殺される。

彼女はバルカン砲をもとのようにしようと、また笑顔をふりまいてきた。

「ボンボンはいかが？」

「いただきます！ いただきかせていただきます！ あむっ……う、うん、けっこうなお味ですね！」

「まあうれしい。全部食べていただいてかまいませんのよ」

「はいっ！」

俺は精一杯の笑顔を返しながら、心の中で涙を流した。

武力行使だ……。

俺は自分のいま見た映像が信じられなかった。彼女の頭の横からなんか出て、俺に向けてなんか物騒なものを撃ってきた。

いったいなんなんだこいつは。皿を食べて、弾を撃って……絶対人間じゃないだろ。やっぱり夢だ。これは悪い夢なんだ。その証拠

にほおをつねってみれば……いたい。

もう勘弁してくれ。

一秒もこの家にいたくない。早く逃げたい。折れそうになる心をなんとか支えつつ、俺はふらふらとおかもちを手にした。

「あら、もうお帰りになるの？ ボンボンは」

また表情が消えかかる彼女に、俺はあわててアメの入ったかごを持ち上げて云った。

「ああ！ と、とてもおいしかったので、家族や友達にも配ろうかな、なんて……ははは」

「まあそうなの？ では、なにかに包んで」

「い、いい！ そこまでしてもらわなくても！ こっちで適当に包むんで！」

「あら、遠慮なさらなくていいのよ」

「いや、本当に大丈夫なんで！ じゃあ、ばいなら！！」

俺はダツシユで部屋の入り口に行き着くと、ドアを速攻で開けて出て行った。後ろで「いけない、お待ちになって。お代がまだ」とかいう声が聞こえた気がしたが、そんなことにかまっていられない。お代より自分の命の方が大事だ。

俺は家を出て猛然と門のところまで駆け抜けた。だがやっぱり遠

い。帰宅部の俺はせえせえと息を切らせて門の前でへばってしまっ
た。

後ろを振り返る。追ってくる様子はない。よ、よかった……。

と思ったとき。

ずらっと並ぶ家の窓のひとつが一瞬、キラッと光ったように見え
た。

あそこはたしか、あの女の部屋のあたり

そう気づいた瞬間。

その窓から、ものすごい速さで人間の腕が飛んできた。

「……えっ」

俺はかわす間もなく、そのロケットパンチをもろに顔面に受ける。

「ぶへえつつつ……!!!」

見事な右ストレート。ぶったおれる俺。

おかもちもアメもばらばらになって地面に転がる。俺は意識を失
いかけながら、目の前に落ちた白く細いひじから先だけの腕をなが
めた。

あいつだ。あいつの腕だ。間違いない。

よく見ると、手には手紙らしきものがにぎられている。俺は薄れゆく意識の中で力なくそれを手にとり、表書きを見てみた。

「ラーメンのお代です。ごちそうさまでした」

かわいい丸文字だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2391ba/>

メカプリンセスっ！ ~プリンセス様、もう勘弁してください~

2012年1月6日00時46分発行